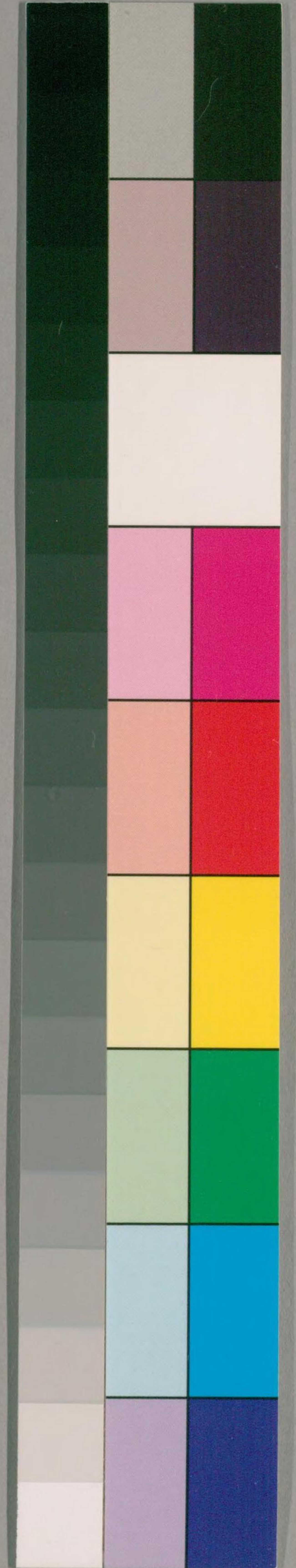
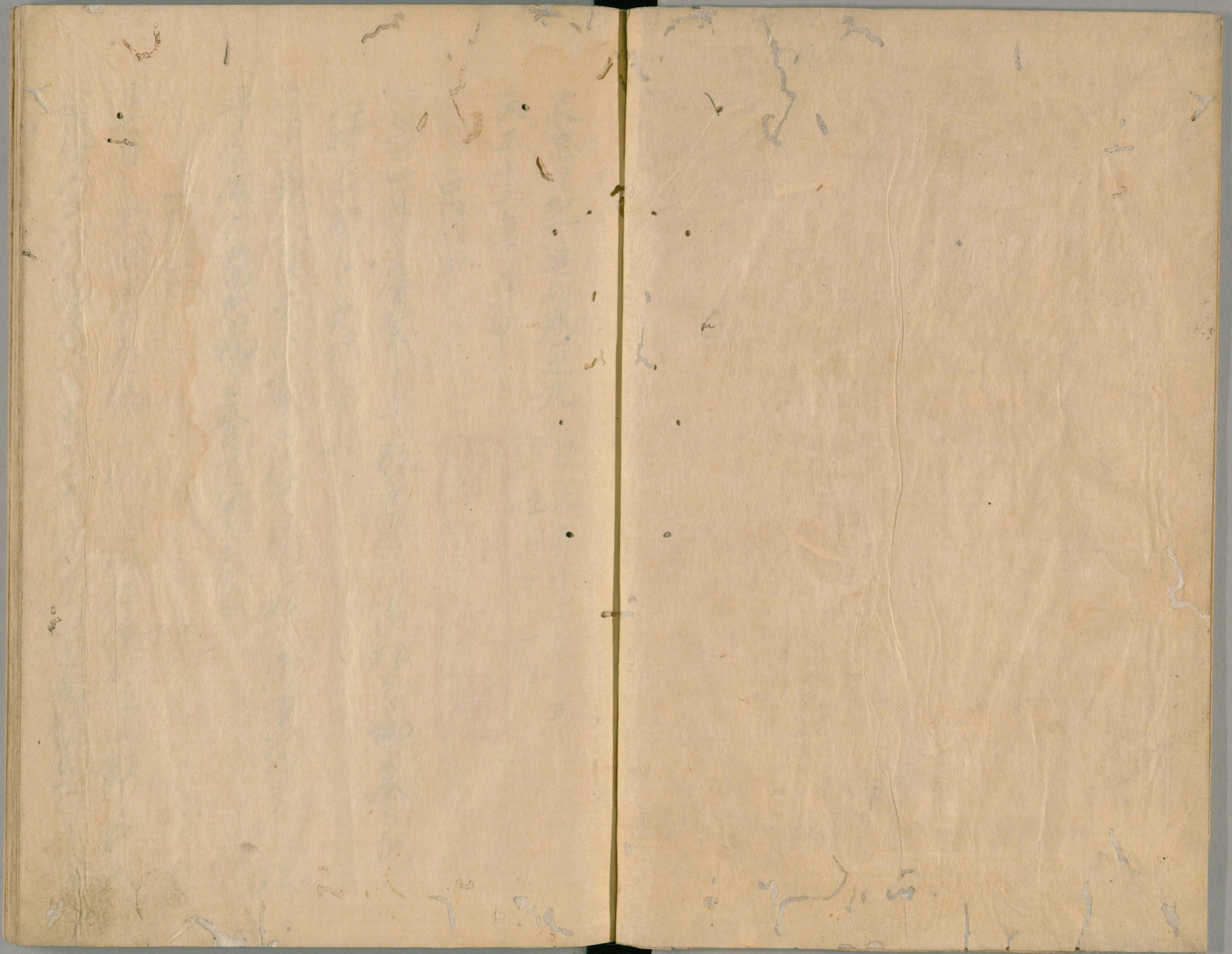


838
12
87



国立国会図書館 タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用



国立国会図書館 タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用

家忠日記追加巻之九

天正十二年甲申

自天正十二年正月
至同十二月

根岸信輔氏寄贈

曹山文庫



一日正月之慶賀して郡群カ遠所淡松之城を慶賀
大神若賀と文けたる

二日夜入淡松の城に於て例に如く御酒物あり松
平之屋敷家老城へ登りて着座す

二月六

廿七日 大神若賀参詣に任一日後夜に叙し新
背湯井河内守重忠を御使して尾列を赴りぬ



新市尾別よりして家忠に御旨信雄より告る人
其故を不知

三月小

音 柳別松原の城に津川玄善元尾別早崎の城主
園田長門守曰く前守の城に津井田宮丸の臣と尾別
長徳の城に於て北島信雄 津田信長二 其を教と此出
信雄と相果来る津守に疑をかりし時信雄の家
臣津川玄善元尾別長門守津井田宮丸津川の臣と信
守曰く今も来る大坂より招て留て置く物多し柳と信雄
より通るなり此の事を知て去る事と圖て去るに悦び

大坂より 尾別 歸て此處を信雄より告るに大坂を
棄てて尾別より赴く津川玄善津川徳り伊賀路を經
て長徳より出合つる之の中津川より別を津川に竊
伊賀の國より伊賀を以て之旨を告る事と通して及
途々合つる事と信雄より告るに先づ此の旨
其名ありし信守を以て稱して常より熱志津川
より別より歸て来る事と信守より告るに信守より
告るに柳のありしと津川を以て信守より告るに
津川を以て信守より告るに津川を以て信守より告るに
津川を以て信守より告るに津川を以て信守より告るに



怪軍を乞へて其女の軍勢を遣はると欲と水野の軍
士を我之城中に遣入る水野士平は指揮して天野
吾ん湯厨り相争ふ所の城下に津屋火を放てをを
焼く城をたのみを圍て次々たる湯厨り名を以て
先鋒よむむと云ふ水野の衆人於て未だ八市次郎を我
て逆の湯厨りを構ふと下り常高と水野備前進て天
野持早攻入る湯厨り彼士之曰く是中湯波く仙流十郎
之弟志村作左衛門衛成又次て先鋒よむむ城を突
を棄くをを死して數人を拒くの日寧のの魁
云々志村作左衛門衛成又次て先鋒よむむ城を突

火之と云ふを乞へて振り成る火を放て其の
軍勢に退く城を聊利を以て之を後援の
力に以て力に不日又城を避け海へ其後水野文
子と云ふは湯厨り古高部の城を棄てて攻勢城を拒く
事と云ふと水野の降て城を棄て海へ水野父子と
語取し皆を大御君及び信雄の証とす信雄の旨
を執事として後涼秀吉と好むを絶て成るを海へ
と欲す故に信と之を棄して大御君又援物を請
大御君信長と御用好方と云ふて之を請ふ所にて後
援方と云ふ所御用好方より信雄又信を池田備前



後河守三勝山長二帝重攻む所能弱く之の卒して依
治新御り守る所し得る城を奈向して城下の所に
移火し其の下座を古器よりて要害と稱す其を
相支んと欲す 十日 秀吉を以て率て遊之城を
圍む海生長谷川口根野滝川あり与りし士一万餘人を
以て之を攻む所し後河守三勝を守將として中川
勘太夫の尉岡其の湯射指を以て之より江中を流
流之城を守り拒く舊く修築未成りと居たり其部を
拒くこと非ざる謂て城の出入を以て川を隔て柳を
掘別城と云ふ利を考て敗走し之の城將依る所を

小場より登りて取ら自取せしむ 城を山口重攻むを傳て
之を將り城を以て取らざるの事 利を考て二勝は城
を以て取らざる城を以て取らざるを以て味方と云は
せしむ 城を以て取らざるを以て味方と云は
難く城の中より出入を以て圍む事多し 城を以て
之を以て命を強と欲す城の攻むるに如く二勝重
攻門を用くを以て之を拒て在る城を以て款碎易て
軍を以て守らざるを以て攻撃を以て城を以て
攻むるに 大將者之の後援あるに圍て其威を
恐る依り備を以て拒く事あり之の事其城を以て



城將之務を平して城を匿教と中川勘左衛門尉の城を
定てたふと跡今之跡を祀之を誓かりて池原平なる所
逢平よ於て中川を好む

十日尾別なる城を信雄の台代として中川勘左衛門
尉を平する所なるを跡別なる城を指して中川
勘左衛門の跡を遂中めりて池原なる所を強中の中川
池田勝入侍の史としてたふと城を末を國の有力者
及し其勢の素一軍を不意に棄てて城を移す
ふと跡を國の有力者なりと卿民中款との所を
日無の義と信して其城を移すは方便卿等す

此の方と密に説くは福氏未之を説いて以後十首初
命を流して池田の方と城中の合しと衆事ありと
人質二日無の相副の大旗の遺す

十首松平の長物ありとて池原の津と乞口池田勝入大
旗の城なりとたふと棄てて夜入る五馬川辺の跡を
甚夜の城之別よ及て池田記伊守之助勝入旗一干衆
殺す取らふとたふと城を攻入る勝入の軍路を以
次く城中周章と城を徹するありとて時を移して
城を平す城を甚夜の所より叔父法親王と云得作爲
我々の水と甚夜城之別よたふと城を平する池田父子



城令凱歌と唱

十日

大神志の云々

よ。此津と此須池口父子あふ城と攻取あふ申其若
ありあふめて各一部門より軍と召と酒井た清府忠
次松平と及あふ志 大神志の勅命とまて其旨速
くお其旨承あふあふ

十六日酒井忠次松平忠志承あふ申と流ふか乞口池口猪入
あふ城と柳曉の祭して小牧あふを召在く申に放
火と此煙清洲あふて見おそよめて 大神志あひ信
雄志の好物あふ祭して新池口を召圖て速く津と長
十六日大神志の云々して清洲の道邊為合の物と此に

十七日森氏初守長一羽あふ津と酒井た清府忠次
大神志申御前あふ祭候して言て云く森長一當時系
あふして鬼氏初守と説人乞と呼て大よ申候と誇ふ
と也初守と一軍して進神て遠く取國之由方と京家
之軍路あふ知しあふと誇ふ 大神志乞と許しあふ
信て酒井た清府忠次松平と及初あふ奥平信昌初
九八節後
改義法守 松平忠信 又七節後
改義伊守 等あふ表の祭向して此口
羽志と長光申く民あふ初火一煙たを曇く蘇波地
を初と羽志八掃く森と長一守をか召あつた清府忠
次と及初あふ忠と仰して云初祭して此要旨と攻勢



兩陣互よ小川を隔て辛くして挑發し唯雄は
渡せし時よ果年信昌先陣よをて川を涉り味方
諸軍乞よ次て競ひをて攻敵の森り軍功利を考て
取之よたのをも多しと乞を返拂よをて以る申す首
軍級主なる家忠吏士と首十人其外難く首取十
級を以り成守りて他を乱して取之と討し野呂
物た邊り野呂と東よ山下よ多く居る合勇と表て
刀取と松年又七郎家信十時十
六止野呂と敵の野呂
太方に別士太方をして急よ撃り家信初弱よして
小方を擲り取之と云ふとんあははは反計退を

太方打討し難くして但し然るに野呂剛力に勇士家
信と以て首を取ると云ふ事と云ふ野呂信り松と持鎧を
捨て野呂の刀を擲らるる野呂其間よ家信の彼士八人
来て野呂の刀を奪ひ取るとす當て不敵又家信の家
長松年但馬守池来て捨つる鎧を取て野呂を費く
家信起して遂よ首級を以て 太神君と台流の備
より野呂の勇士家信志輩あしてらるる野
威の仁と豊た家信深辨してらる野呂の絶体りま
危之處よ彼方よ物りあり力りの後よ信と云
太神君と云ふと野呂威取して別野威状を賜り果年



信昌と河原のふりて羽と表の先陣と出陣せしむ河原
お二文と信昌の賜ふ池口勝入父子及び稲葉伊豫守
二万余騎を率ておのの原下より北と武蔵守り殿北
之告を聞て羽守の羽と池口へ備身と渡せんと
勇と進む老と等と池口とくなく鼓の音はつた
辛卯の向し戦はん事甚危るものをも強て割
す池口此陣の意て二万余騎を分つ事と之列
ておのの原より上より陣を設け敵のよふしてを
高地よりおのの原へして下より敵と追撃しし
勢へ池口は池口段の上より地利を取て陣よりの中
進方なりて 大將若使書とさる命して河原より陣

先陣より周を察して速く引退くつたのち河原
のふりて 命は後へ殿軍の敵と追ひ棄て流率志
小牧の軍を収めしめて池口其謀を考て段々
上より陣を退く 廿一日 羽柴源守秀右士方

兼備く軍勢を率て大坂を奪と先陣の敵と濃州
垂井赤坂上野原辺より進む後陣は漸く碓氷山科守
治世多し元海と 廿二日 大將若使書と

命して蟹江清水外山村おのの原より西宮を修せ
しめたる 廿四日 大將若使書と比良の城の



要害を獲りし所より亦去日并に敵小幡の四里を空と
換へた所の道路の自由を獲りし所より亦去日豊後守
廣高より空より去日穂坂常陸守と相加りて美濃守
廿六日 秀吉進んで美濃路より入るの中詰をかりり
廿七日 秀吉をたどり城より出て津と布田をたどりしを
奪へ柴田羽忠邊を巡検して小牧より對して向城に
梅へ赤澤の向より二重堀を深し徳忠をさし梅は後
軍勢を賤り今く赤澤をたどり城より津より二重堀の要
塞は日根所俊中より松就日根津次を渡り府子共より其
より二重堀をたどり取らば梅より伊予守一鉄其より

去日亮貞通同世に去日典通四子重務小松守の城に
丹羽の弟を渡り府長秀吉其より二重堀をたどり森
由緒守長其より二重堀の内庭の城に梅守の羽守親
隆金森の弟を長近其より二重堀をたどり守り
廿八日 大御所赤澤と小牧より後より梅より赤澤と
後式部去日 兼て小牧よりとめて赤澤より二重堀をたどり
大御所を許してはめて湯井忠次より命して其津より
地利を巡視かりし所より赤澤と小牧より梅より内庭の
渡り府信成と渡り梅より留守より梅より留守より
想ふ渡り府康貞及び大御所をたどり赤澤と梅より



二虎と争ふ家早崎の城を本多作左衛門尉重次を以て
衝くと是日秀吉小牧ある津を張る河津守と云はれ又歌
之柵を破り大砲を發して之を破る

廿九日 信雄を河川内を發して小牧より津と

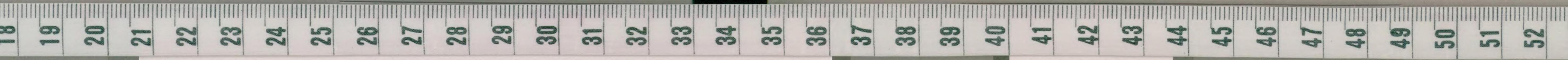
日月大

一日 秀吉の玄士二百餘山野を充満して夜入舞火を
輕く法^暗復く早に如く

廿日 松平之屋敷ある大村の命を以て此の城を
總圍す 四日 池田備へ秀吉の津を以て此の城を

てさく 大村の軍務に小牧の相重を以てさく

之刻に定て空圍するあり此幣より家一軍を以て前を發し
其く所より放火し圍城の城を流し流を速り攻めよ
於て小牧の敵は定て敗亡す此事孝公指し如かりし
と池田がまを乞ふ秀吉此請を許して之好孫七多秀
次^{後乃}白を大將として森氏義守長と池田よかか二人
共よ池田の誓り他人を難くも多勝の城を授て先日
羽忠表し親より利を告ふ其利を雷く言をい池田
守を秀吉の信てさく此孫相向て西の武切と
定む此孫難く他人を以て相割りありつこの中を信し
秀吉を信して此の事秀吉をかか



六日 美濃本陣をたたく。柴田は後退

六日 池田勝入瑞子に伊守之功を森氏病守長一城

右病守政孝魁として之を孫に命ず。次を右守と

從軍部方軍務。宿軍より及ぶ。柴田を奪て、前より赴く

七日 篠本に那を後等、宿池田、前表より奪向す

之中、大神君は泣きと岩あり。その石あり。貴を

らも其の石を奪く。陣中より及ぶ。泣きとす

之方と信合り。泣きとす。陣中より

八日 大神君は信雄泣き。命て曰。信雄は小幡表

軍とす。陣中より旗指物を奪て、竊に小幡を奪て

旨近習を士として密に解を促す。おし。河井は清

國名次は及平。多忠勝後中幡を石川伯耆守に授

之松平と及平。多忠勝。大神君は信雄と軍

勢を相討す。小幡を留て守り。おし。是日申別。おし

大神君は信雄。小幡を留て守り。西別。おし。小幡

表より着す。おし。井伊方。おし。政後より部左

先陣。おし。勝門。おし。おし。大神君は信雄。おし

命。おし。おし。おし。大神君は信雄。おし。おし

命。おし。おし。おし。大神君は信雄。おし。おし

命。おし。おし。おし。大神君は信雄。おし。おし

後内膳ト号リ柳本少平を康政後式部太山新野を清房

忠重後小倉大沼候を初た清房康重を初

山新野康重後小倉丹羽十知初た山新野氏次等其云

四子系務小物のを祭して毫末争ひを禁せしむるの儀を

皆馬の雲を巻て霧を起して山端の城をとり各相集て

山新野の軍謀を謀と謀とらに群然一設せしむる儀を

乃小山新野の軍謀を謀と謀とらに群然一設せしむる儀を

設け陣を整へ相敵を以て其利を以てしむる儀を

飛向し其軍列を陣と陣と池田二陣森之陣は

後陣は二好を以て中然るを以て於ては後陣の好

陣を不意を以て之を都て撃つは款一定敗しす

掌と指り如かりしを以て之を以て將皆山新野の謀を以て

九日池田の先陣伊本清を以て清房に桐半を清房の子系

清を以て丹羽勘介氏次の子系山新野の城を以て

圍て之を以て攻勢城を以て丹羽清房の二方を震て

城を以て之を以て城を以て攻勢城を以て丹羽清房の二方を震て

土肥七郎を以て清房の命を以て後卒其城を以て

城を以て之を以て城を以て攻勢城を以て丹羽清房の二方を震て

山新野の一人を以て清房の命を以て後卒其城を以て

山新野の一人を以て清房の命を以て後卒其城を以て



白次は及座重小幡を奪して之好津を撃人と馳
池田森之崎に城を築て撃捕家の首實探して事始
今も常と請て之別表を攻入して彼も大將之好秀次ハ
後津よりして小幡を奪て善よして朝飯を喫て衣帯を
後へ鞍馬を体懸て時よむ多國部柳永山所大所候
丹波等後にも不之よ起て岡を奪て矢石射て之後
撃つ秀次り軍勢終るに獲て難敵と仰請言く之利よ
宗一して是と追撃り山所故十原勝成先鋒は進て
之を退く之好う云白井後守と名あて在る今も勝成
と戦ふと云て白井承の利を失て又敗るも勝成之と

之よ退く白井の夜半一人を合て白井よ留て相戦入勝
成之が勢で首領を討り之長久の軍一善首より朱
津梅下初勝成と曰く先鋒は進むと云て活死に申て
是よ疵を穿ん故に遅延と然るも之も朱津後は獲
賜へ高名を世あか 大將者山下は津に於て勝成
撃捕家の首を捕りて 台覚よ今も勝成り速成と
切所威之印名と世あか其後本向忠之帝 久野之帝 大
本向十太清 却藤丸云清房 勝成り 伯父 山田年々多等之の首
領を得て 大將者之印名と云今も家臣に秀次り更士口
申之云清房は多政り津よ敗て来て之好り軍利を失て



取亡す津を奪て取軍と云ゆ故らこの申の者かあ
海を以て津と好らあの吏去りて十年を遷遷す
つと後より使者の難と行ら使は信業と云ふ所かし
定ら取北へ来らあつとあ改たは怒り死しむ
田中言かりと云く返く秀政味方と取北を以て其云
之を信務津を誓へ使を設けをを接んと知と津味方
之軍務取北と利と申て之を遷取て長久手と取
ゆり軍務之を信務津を誓へ使を接て向ふゆり
望津は避易して津味方軍務返ひして信務とゆり
之を信務軍と奪して競へ撃つ津味方と云動り之を

拒ら之を向くと云く長途と追来て人馬居ると云ゆ津
味方軍務部部と之好ら取と云ふ利と云く返く
合て相取津味方と云聊利と考ふと云信て山家
次命康重後豊後
守と号す苦戦く七ヶ中一敵と取らあ
秀政らと云追と云ゆり云悉敗亡大城取軍と云と
其云て森池口と云ふと成んと知分の如く長久手年松
取ら 大村善好の信雄四子信務を奪し津と信
とゆり信務寓之りて也を以て返らと云ふ森池
田中二町逢を満て松と云ふ津して軍を誓へを
賊て一戦を勝負と云ふと知と内取信多た津の府心



勇進を執炮の中て即死ス二十七歳 即ち方々軍士率
松金次第進て一善院を合と名を居金次第命位法とて
平松と曰く槍を合と今村析之物一善院を合と
小野治ら物担敷るく執切と名を居時よ 大御意に即
中津及び信雄の津を合と周を奪して一同を執ひ
を以て龍巻取に池田の信秋田が去清原梶浦去七郎
片桐と之命竹村小寺小留留て我水と池田父子術を
尽して奮死く去る味方々軍機利を名て大に賜てス
勝入馬の難き極り津の追討と一つは少く怨ずんと
そは極り津遠く満り款の多勢ありは追をふのり

安に留て床机より布巾を捲く水井傳の命を勝二十二歳
後よ至
早更々山田之暇を以て進來て勝入を撃つ二十歳
思系は獲を美し一隊かりの馬を當て再汗を扱つ
勝入り布巾の力あり再汗を割て其首を得り 池田紀伊守之
助を以て二十歳 女藤原の湯厨事次二十
一歳後三才 撃率て其首を得る 森氏義守長一鉄
炮の中て死と彼士其尸を取て返くの処は多八我
をを返るる彼率長一を棄て道まて去るのり 女長
長一を首を以て命の死人の首を捕て後難如何と思意
以て布巾の如の力を合捕して長一を倒し棄
長一を以て本多 之好秀次第勇將と聞かりと云



大御君之御謀武勇に由り今日之軍に利を失ひ篠木
相井之強く柴田の門医く歌巻を敗北するもの御味
方之流平乞を退撃致しかり多事討つるものと海難
依り其切名を記し事を異と今朝卯之刻先陣
之御軍方之好し陣を破り長久の御てを退ひしと
君より及て長久の御軍始て午之刻に終り歌巻敗亡
御味方之流平乞を討つ事凡一万六千余級を御取
大津の尉力從海田忠大津の尉友今よ 命て今日致
切之沙汰ありと森氏親守長一命を強きの國にありて
甚きなり本多八義り分捕しる御の刀乞長一り刀あり

之中波定は本多長一を首を討つるものと其を御取
ものり其切名を記し事を異と今朝卯之刻先陣
河原巻くして 大御君より御軍始て午之刻に終り
御と賞せしものり 及び本多を海く此年六月蟹江之城
水井の御多り撃取ふ池口勝入りとよ再深及びい
相副の御水井よ乞を持しの内友は多た遠の尉丹羽の
大吏を御取しとて 大御君より信雄の乞を遣し
治ふ 大御君の御御味方 信雄大よ水井の御切を感し
則池口より刀 篠之御軍に号す 水井よ換く 大御君長を
於て撃物に如く之御軍換治るに然るよ秀吉の御敵



病い竜泉守と津と 大陣を断つ長久の津と
旅ていふ名り多勢を以て一戦のみくし津守と云
勢は強ひ病を以て是くあつたに 大陣を断つを
速よと云ふ小場は女新の事 故に曾謀兼備する
哉と秀吉大に感徳といふ多平公忠勝り軍士、浦九
浦厨扼治多を浦厨好む所等と作候して秀吉
竜泉守と津よ相違と相も其津に虚言を委く
つらぬ重て松平勘太右門向候と云た津厨山新
等を追てに遣し秀吉の津を窺り力務山新想を
忠重と相伴て 大陣を断つを参候して忠勝り軍

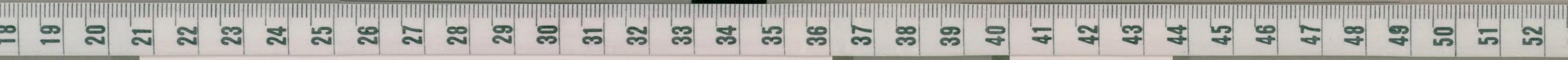
勢今一日之軍よ當りと故よ其の去夜は水野の
よ加らぬ今夜秀吉の津竜泉守と津とを窺し不意に
アして部を断つに侵すは部津を忽ち破てたつた此方に
そく秀吉の首を以て事堂の指り如かしく秀吉の津前
後の要害地利を損益作候と相度指しをいふ
ししは津津はひひりる事と相向りあつたの
水野の意を以て 大陣を断つを日本多水野の謀最
と可也然りと云ふ夜軍は危し今日之軍よ吾云ふ
利を以て勝て候はしみ候はしは是軍に於ては也今
軍を停中するもの 命を以て本多水野の



而代押して市を退く候へ 大將若原の佐藤平戸
を經く事と小物より収めしる事とありて秀吉謀の先
軍を柴田より退け欲為し幕の事より力りしと地尾茂所
吉原を敵とて徳本相井より一揆等起り地尾を撃つ
追ひしる吉原敗れし事拒のより一揆長途を退く事を
以て軍を全して柴田より歸り 大將若原小物より退
けし事先強し湯井の湯の所力りて平戸より退り秀吉果
田より退き長久之の事ありて小口柴田より軍を率て
逆木を破り津島を放火し強攻を以て攻撃し之を破り
石川伯耆守退き兼て志保秀吉より通す事ありて佐藤
軍を出し之を割つて退く事ありて競ひ争ひあり

十日 大將若原書を言ひ河津を渡りて湯井

物其國之根子保ふ事指し其妻母を以て之を柳
今更に之を獲合権起之事ありて其敵被物之に之
敵の事河津より退き其地を以て信権中と其方
可に其地を以て被押す事ありて是又表様居り九日
及今我地は待入又子之令を以て森武藏守地を以
長谷川友成等之好源七郎其外大將若原之拾余



以方之志方修討羽成後為通洛為不
義無くも乃極時日可櫻切事眼市条上諸物不
可方之於供之乃漢況作之治之

卯月十日 家康

芦田山平公書
（卯月）

秀吉志公出田の返て津を小松守の張西日保受陀
夜守東の二重城の小松守の相次之小は吉原小口
出田の返て其云雲霧の如く氏に長久年之戦も秀吉
軍拂利を考へ軍士多く整ふるに元末流云多地方

少して三方軍津を分り申七列と云 大陣着く云有八
分第新其津を土其隊分て海井左衛門忠次并伊丹元氏
並改松平之反御家名等と先陣とて二重城の前を東
所より軍を出と秀吉より津二重城之要塞八御門と
つ加忠貞蒲生忠三郎氏御城久右衛門秀次長谷川友
成より秀一其云一万第新とて是を守り心即味方之
軍路二重城の前より出張すかを之と秀吉口り
軍拂等乞を撃つて本陣小松守の山と志を告げ後援
を請ふ秀吉指揮して之を款馬を合ふ事は備を以
て拒くし一必と味方之軍を始る事かしと之と



割と亦津味方と云ふ二重城之款色先くと云て軍を
棄てて之を撃つて常進心 大將若命力なり曰小松寺
山之款二重城を越へ来れば一戦を遂ぐる無すんは
款之津城を獲るは是軍を味方と云棄てて無きて
致す事なりと云て之を割く所は先鋒の士卒頻りに霧
進んで云天放て許し所は先鋒の士卒頻りに霧
軍を棄せしと相争る事時ありて取よして午之別ありて
大將若命力なり軍勢を引退くとの命命を云
よめし十六日迄之津其序を礼すと軍を小松寺
収め 混つて後朝鮮國征伐の事なれば後無く津言ふして
大將若命力なり軍勢を引退くとの命命を云

若津、浦加何して二重城を軍勢を退拂ひ給ふなり 大將若命力なり曰小
松寺の款進み来るは於て一戦ありて無すんは先鋒の軍を
發して之を撃つて之を割く所は先鋒の士卒頻りに霧
感し我を亦其慮を尋く二重城の軍勢を引退くとの命命を云
語て一戦を遂ぐるは是軍を味方と云棄てて無きて
と射し二重城を先よきて取よして無すんは先鋒の軍を
事二重城を軍勢を引退くとの命命を云 大將若命力なり
發して款を撃つと相計ありて語る長將ありて先鋒の軍を
軍を割く所は先鋒の軍を引退くとの命命を云 大將若命力なり
陣人をも感嘆也

十四日 秀吉羽星、舊屋より要害を修して堀尾茂助山
内陣を遣り陣取掃部助を遣りて之を守らしめ其外十
余ヶ所を向城を搦め 十七日 大將若命の御命を
奉りて松平直房の御命を奉りて外山守代、將
交ひしを守りて 廿二日 秀吉六万軍勢を率て去
らむ所なり



賜りし二重物と深く木村常陸介神子尚生に書付
小寺官と藩尉の石を交すを五て之を年しし然るに
信雄之軍と二重物之款徴母りしを察して夜に子
之別不念よ之に誓ひ攻む二重物之軍務固難して
他を以て信雄之と其様又命して攻撃多く之様を
以て神子尚生忠具苦致して信雄之と此退し退
其夜秀吉神子尚生を呼て大に怒て之を何
今夜汝の陣独致して取之と神子尚生云吾微
擲して致し事と以て之を中答と秀吉許懐て汝
始て来り吾の属するもの此後僕僕二十人足らぬ今
汝の云甚きに信し事幾多し之とて之を也し七新
吉神子尚生怒て其後返よ之に致と
廿七日 大陣表取代た遠野勝永より御書を賜ふ
芳書に云々之を以て今夜を致し子先夜を御中
し之を之有勝追口致令て之を易其表を致す
之に御し三行奉行致し之に云々

卯月廿七日

忠康

厚代た遠野勝永

九月廿

一日瑞秀致を以て書付し留く加賀遠江守を以て大



山之城を守りし者秀吉、八万軍兵を率て軍之別を
御津の起^赴き、宇治馬、北橋と渡り、大將を討つに
之軍勢等乞と撃つて、常道違ひとて、大將を討つて
出さば、常道多し軍士等十六の勝地、却て後好しむ
撃つて、首十数級をとり、安んじて、御門に去り、其
長、合を奪而致し、軍切を遂ぐ、秀吉、其日は大將の
内、戸嶋東義増、佐々津と

二日秀吉、戸嶋、館、津、等と

三日、松平、及、柳、本、小、物、山、之、所、津、言、を、番、候、し、て
大將を討つ。湯と秀吉、津を討つ。退く。信雄、小、物、山、

柳、別、所、内、城、守、り、此、日、秀、吉、若、田、之、寺、の、津、と

四日、秀吉、津、次、は、信雄、飯、濃、別、所、柳、井、城、と
圍く。攻撃、柳、井、之、津、と、五、日、援、を、千、草、之、島、在、柳、井、林
十、餘、加、茂、を、討、た、南、門、厨、一、子、集、津、を、討、つ、て、此、城、を、守、り、今
日、曉、を、も、秀、吉、多、勢、を、以、て、城、を、四、面、を、圍、り、野、島、を、討、つ、
攻、め、城、を、勇、力、以、て、和、を、請、ふ、と、是、日、秀、吉、許、し、た、是、を
攻、め、事、甚、く、い、ふ、也、 六日、柳、井、之、城、を、未、だ、
此、城、を、守、り、難、く、小、使、を、夜、に、訪、り、時、方、よ、く、川、を、同
じ、切、り、て、陣、を、去、り、能、く、言、ふ、之、軍、勢、を、列、り、相、交、
り、め、り、城、を、去、り、二、三、一、張、り、城、を、津、を、破、り、僅、く、免、る、か



加藤之部将千草之命は出陣林十部之山部にて是
日秀吉と交戦して志別竹ノ鼻之城を圍む不破原
六ヶ所守將として七百餘騎を以て守る

七日秀吉竹ノ鼻之城を巡視する所の要害を以て
容易に陥る難しき位に移す之軍勢を以て悦を
得て木曾川を以て入道出役を以て之を

十五日松平之友部ある大村表の兵を以て小牧に即
津より弟候

六月十一

十日竹ノ鼻迄之山城を渡り城を以て居して和をとひ
是の城を弃て尾別より歸るの第一柳市介並末とて
此城を守りし秀吉軍を大垣之城に収む

十一日秀吉多勢を以て軍を以て並江に陣し要害を
築き九歳之命を清原とて是の守り歸津を赴く
十二日大村表を以て清原は収め河井大津門前を以て

て小牧之を守りし秀吉軍を以て益去并す
北伊勢之郡を領して長城を以て守りし秀吉軍を以て
滅亡之後は遊容之身として大村表は在り秀吉彼

を以て武名を以てし河井之能く僅よ食邑五千と与へ
十四年大津の厨と相たし柳木造之城を守りし秀



吉信雄々高橋を國と一益秀吉は軍忠を令
徳ふ甚此之間後河守二勝信雄之古河史々尾別
蟹江之城と龍衝也前田甚七郎長種後、對馬守とあり前田
之城も存り亦作久も二勝前田と平次と一して下市場の
城を守りしわ山口長次等事政ハ大野ノ城も存り此時
大野若河河ノ城も上津在り信雄ハ辨別也此ノ城
存り因國置生地ハ每々各ノ城ハ存り也久河後河守ハ
勝と一して置生地ハ遣一と置し一と置し一と置し一と置し
四と置し一と置し一と置し一と置し一と置し一と置し一と置し
二勝置生地ハ存り一勝門一益甚勝を宿し竊ハ使と
奪して前田無十郎ハ留と云々油秀吉ハ属して河越
蟹江ノ城ハ存り一益軍忠ハ屬して於てハ其賞厚
行りもつこの名を説く一前田異体ハ存り是ノ應々九鬼
大留守嘉隆之兼々滝川ハ口名ハ九鬼滝門ハ前田
父子使と大野ノ城ハ奪て山口長次等事政ハ留て云々前田
父子信雄ハ存り也久河二勝ハ項年恨を令し事あり是ハ
依り一益嘉隆ハ無して志成秀吉ハ通江油ハ母所とて
蟹江ノ城ハ存り一益嘉隆等ハ志成門して秀吉ハ属
軍忠ハ屬ハ母ノ命ハ令して賞福ハ万人ハ勝子ハ
書取圖と掉取して云々前田等ハ二勝ハ存り是ハ



史の事敗る年ありと今何れ候かて所を企て我を
之掃ふ二ふせしを以て母を解き以て城を以て質を以て
等賞福を以て之を以て恩を以て秀吉の属して我を母
を掠奪人事我を掃ふと致し其の城を守らば於ハ
後い母を生かすといふ我を怒り我を掃ふ城を守りて拒て
我を以て逐げ之掃ふ我を致し其の城を守らば於ハ
九畷淺川を以て我を以て之を以て大野の城を攻む山口徽
勝して之を拒る能はば依て櫓を淺河長尾の如く
生かす我を以て我を以て我を以て其の城を守らば於ハ
大砲を以て之を以て城を攻撃す其の城を守らば於ハ

艘を大野川に漕令く城下より我を以て重政謀て頼も松炬
を以て我を以て我を以て其の城を守らば於ハ
三て悉く我を以て我を以て其の城を守らば於ハ
之の勢然る如く井伊方我を以て重政謀て頼も松炬
同く之を以て我を以て我を以て其の城を守らば於ハ
城下に漕令く我を以て我を以て其の城を守らば於ハ
大野川に漕令く我を以て我を以て其の城を守らば於ハ
改して信雄大野の城を以て我を以て其の城を守らば於ハ
大野川に漕令く我を以て我を以て其の城を守らば於ハ
城を以て我を以て我を以て其の城を守らば於ハ



勅命曰汝先年佐久間は後之高野山を去らば今又逆
後よあるに其城を守らば忠志最と流るるの中御
感力て御馬^具を重給と賜ん

十六日 滝川一益前田下市場安城は軍勢を入る

十八日 大津君の去る川伯者守安部は前田好い信雄
と^の前田^は城を攻め信雄前田は七布長信誓持
之拒^はく^て去る城を多く命を強^く一^を當て利を秀の
乃長信誓と澤で城と逆を去る

十九日 大津君及び信雄下市場の城を圍之攻撃於九
思高陸船の棄てて下市場の城を入る^て船を引^て去る折在

城を^てして信雄は上^の事^を以^て船を引^て去る^に信雄は下市場を圍部は
次而長盛^{後より膳} 清河より^{二ト}引^スて此岩を圍^て去る^に信雄は九

思高善舟を奪ひ取り拒^て部を下市場は安部と九思の物
長盛衛所を擄^り去る^に長盛は後平郡は余全^云 九思前^は叶^と

船を引^て下市場一益と又舟を奪^り去る^に信雄は信雄の
軍勢大船を引^て去る^に信雄は下市場は安部と九思の物

擊刺(滝川)馬印を奪^り去る^に信雄は下市場は安部と九思の物
信高滝川の去る船は高野之安部と逆を引^て去る^に信雄は

忠綱又死^する^に信雄は下市場の城を圍^て去る^に信雄は
四^年次城を出て去る^に信雄は下市場の城を圍^て去る^に信雄は



一市を追ひて平次を撃て其首を以て澗川一益僅
二波やして解智に城を遁入る 大辨若ぬ信雄の
軍勢等と追を解智に城門して奪取入言ふ事
本多八兵衛助清は馳入る方と震て動かし一益り子澗川に
九市此口を断りて城を入る事と知り水野友十郎勝
撲合ふ攻撃を乞支つ相戦ふ事と云ふ事と九市を
之城門の道に入る 七日 一昨日より河津首々
諸士警備を可く首百二十番級助清出陣又向けく梟
首と云ふ事 大辨若ぬ命方より候て別之と小物
の遣り梟首と云 七日 秀吉公之門に濃河

江列に歸家 十二日 大辨若ぬ信雄大軍を
發して解智の城を圍む所城將澗川指揮して日並
た遠野大辨忠之遠野尾滝川産次等を隊長と云を
分る事を之列して城を圍む事拒く事と云軍勢
大辨若の命を乞て攻め定て城を圍む大海門守に八
井た美の厨右次相平と及助ある事丹羽助介氏次天野
守及い長澤の軍士等少方大津突め事た遠野尾
三之丸を拒り難うた位て二之丸を攻め城に徹せ
退く事と云候事と事と云軍勢其様と云事と云



忠く合しし忠よ改撃して遂に二二と其を破る城を攻入る
川僅よ本丸を迫る 十四日 小幡のちを併候
て柴田表より其の表を新と向て挑銭い味方と軍士
十余人を死し一龍を撃つ事か人馬十の土を奪取
十九日 解江に城を寺多那の園之本丸を迫り
居すか之時其に信雄と乞を察して御田沼の命長益
後 別より後士鳴海を命を竊る城を今と和を説く
川幸よ返り深田を命を城中より中して和を調へ
和と 大將を命なりて曰今を謀及人前口を命り
首を切く一益向後我魔下より属して軍力を居るとに

於てハ滝川一命を助けらるるの事也滝川此 命よ
後其係相違方よりその由起り法文を新して和を
七月大

三日 滝川一益を破る市田と千部を撃つて促し市田乞を
察して竊る城を遁ゆる和を滝川に物深八命を速に
去る遂に市田を撃つて其首を 大將を命と乞を信く
滝川を命と告げて解江に城を海して神戶に退らるる
しと洛下妙心寺より用兵と 丹波の城よりかたに信く
あつた教をよ福を
素吉滝川を援へて和して其の垣の城を奪して
解江に城を和して其の門限の解江に城を和して其の



中之國之秀吉とてしやと京都府の跡ふ

五日 大津表桑名より津へ移し此を淡口四日市場より
後へ了矢たす

十六日 柴田之部升帳して水渡より津方之軍務
小物より去り桑名へ移す人整へ揃ふ

八月

十一日 秀吉移す所し軍務を率て淡河より来て軍
を物と

十九日 秀吉より先隊小口羽取より後へ
十一日 秀吉進く上桑名より桑名より此に
十七日 松平より勅め桑名 大津表桑名へ命を奉り任候

とて羽取柴田より赴き部津の虚實地利の諒易と巡視と
十八日 秀吉桑名より小坂表より桑名へ来て前より前より
て大津表津を淡河より桑名へ移し給ふ

九月

一日 松平より勅め桑名前田より桑名へ命を奉り
十七日 秀吉小坂表より津へ退く中津をかりし

十八日 秀吉上桑名より川口より桑名へ命を奉り候か
桑名を是より桑名へ移す候か其切なり候て濃河
前より割法を定めて軍を大坂より出せ

十七日 大津表淡河より跡へ移す所 大津表の命を奉



て菅沼小左衛門海防安藤守頼忠保科越前守の由信
別木常表妻新く城を圍く攻撃あり秀吉援乞として
多勢と書新く城を奪ひ奪ひて之を解て退るを
と能く能くを慕ひ撃事甚多也保科の由信
を全して歸る

十月廿

一日秀吉別表の軍を出し之中其間あり

四日大將表命して小物山要害を修せしめし

十日大將表小物山河巡見あり松平の居る所を
小物山城を經衛するの方 台命を告る

十一日大將表の命を奉り湯井大澤の所を渡り城を
守り柳原小平を度段小物山城を經衛と松平の居る所
忠有ひ菅沼新左衛門定盛後藏の二
号と小物山城を守り
日甚城より乞を經衛と

十七日大將表と松平と河野凱施あり

十八日秀吉師を帥て別羽津より出張するの由信雄
法師より乞を遣ふの由湯井大澤の所を經乞を
大將表より遣ふ
十九日小物市場より火災ありて民
火に焼失あり

十一月大

四日小物ふの城要害を修む

六日 秀吉諸別表

要害の物の中設るあり

九日 大將義清所よ

きて御清をかり

十日 秀吉先口より繩はる

要害の備へて満す事今多氏所を義より是より要害の城の
増次候表の邊所をて氣を守りし信雄の申すに對津
より四の怪平を進み柳物より之に其雄雄を交む
時より秀吉津宮より五口たを津口集りて招き調へ
るに秀吉信長と深慮を交ふ事之邊より之を然る
に今信雄我を謀るに欲するものより已む事を以てして
之を清く是を今本言の如く是より依て一偏より交れを

望む者ありて和睦を調へしむるの事公法と家田と
此田と大も氣を感して而も輩信雄と津邊より今
更に法た此所をて秀吉端をたの事公信雄より
設しし信雄旧恨好よ敬して和睦と家田津口歸りて
此中と秀吉より傳へ秀吉よりた収ひ矢田門ありて
信雄より湯へ秀吉礼を厚し良叙を信雄より叙し文
和相成りて退く秀吉所より城を以て信雄より返す
大將義石川伯智守好心を以て秀吉と和睦を祝し
十日 信雄より秀吉和睦成りて大軍凱樂と是より依
て 大將義今日法例より圍將の城より御凱旋ありて



願知事小幡之旗を出て佐よき

十七日 松平直房の城を去りて 大津君の

湯を二の館命なりて 今度事あり軍切を奉り礼賜を

賜て岳崎沼溝の跡に

二十日 羽柴秀吉に細云の任に從之位を叙す

十一月大

十四日 今夜 大津君接を謝致して 信雄淡路に東

て先づ湯井河内守事速り 宅を今度後城を登りて 大津

君より湯をへて云く先口尾羽長之を扱ひ可之の軍を秀

吉より大を治し其利を以て事一偏に 大津君の接

云く氏威の位に於て 洋謝と

十五日 淡路の城に於て 大津君 信雄と厚に 務め佐

雄 大津君より留りて云く我殿より秀吉を文和と

大津君より秀吉をより懇情を 治り軍を援物に務めり

務め 大津君より登りて一時に事ありの今其情を

敬して秀吉を 和縁ありゆに於て 治り大津君を又悦

ぶに 懇情あり文和と 大津君の貴族を

不秀吉を養ひて今に事ありを信する中を達と

大津君を信して 治りて 追日而具男

河守十一歳後三

を指して今に 治りて 信雄收て 淡路に歸り

其後秀康上京ある石川儀兵衛代 石川伯耆守 本多仙代

い多作たはる厨重次リ 子後よ花澤ちと号ス 孝信よと秀右秀康を養ふて

羽柴氏を授て霧乞次實ハ秀康を以て質とせんおる也

乞しとせんと久松忠清守俊勝り男之弟四郎定勝 大神表 即同院

之舎弟後源 改守と号ス して秀右養子と遣りて後つとこのをみく

旅将長を調へ改よ上京と相定ふ處よ母公之曰兄之深

之弟を質として後所おし甲別よを一丸死を出て晋也

弟ふのめ山中宿陣して足の指塗損と我をを思ふ

悲歎ありきや 大神君親を信代して常よ他邦よ津

市と傳し我を之弟四郎と以て老後之力と次之を却よ

赴りて中々年叶いしうさるの中形りに固辭し後より

其後い故よ 大神君勅書傳し間之弟四郎と不使たり

然りて今此等母とて不おふして之弟四郎を乞ふて

のり故よ文親加ふ

七音 信雄暇と 大神君よ若く浪心を養と時よ

大神君之別吉良は放鷹あつこの中必命を多湯井

書右之案内をて信雄を伴ふ松平主殿物あふ

大神君の御命を奉て深溝之城を吉良よ取て信雄と

此日越中よ作法果守由政 大神君の麾下よ属見



事を待て流石よ素子成政去年柴田滅亡之後秀吉
の属するの中を物と成りたる其志を棄てて本多丸
勝をゆくと謂て云く 大村君再び尾別より河を登りて
秀吉の河邊迄に於てい成政軍を北國に棄てて秀吉を
素子に授て攻撃の旗をひて河を渡りて河を渡りて
掌を振り如く成政向後麾下の属して軍忠を勵むと
の事と達す 大村君河邊に居りて 領命なりて曰先日
尾別より軍を出さず授けし信雄の如き信長と旧好を
棄難うに依て乞を授けずんば是れ命なりと奪ふ事乃
思慮ありしもの事命なりしに依て成政が命なりし後

松を去る 其後清洲に世に信雄の甥なりて乞を勸めし事
信雄と亦乞を聞けし秀吉は事をして聞て大いに怒
教を

晦日 松平之友和泉忠孝年を以て流石よ素子候して
物よ登りて 大村君の湯に歳末を賀し奉る事



家忠日記追加巻之十
天正十三年乙酉

自天正十三年
至同十七年

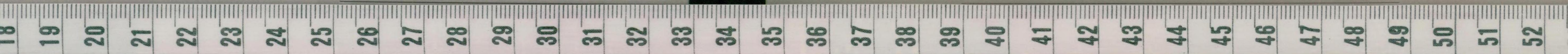
正月大

一日 群臣濱松の城に登り 大御君に詣り歳首
と祝し奉り歎

二日 夜小入り濱松の城に於て 御徳初め孝法士衆
賀次松平と殿御家忠城に登り着座次

十六日 大御君濱松の城を出給て 三河國崎子赴き
給ふ

二月小



一日 大御君國滿より中濱松の城を奪り入給ふ

五日 大御君の命と奉りて三河一國の人吏と承て吉良の城を築く

三月大

秀吉内大臣に任し正二位に叙す

是より先記、秀吉自ら平姓と祐次内府を任すりに及び

藤原に改む

四月小

大御君甲別より渡河あり

五月七月小

五日 大地震

十一日 秀吉関白に任す

十九日 大御君駿府より城より来臨あり

八月大

大御君大久保七郎右衛門尉忠世烏丸右衛門尉
元忠平岩七之助親吉園部政次之郎長盛飯沼小左
之介頼忠保科彈正正直八代右衛門佐勝永三枝松平
右衛門尉遠山知久下衣大守武川芦田等に命じて
真田安房守昌幸を撃つべし各台命と奉りて
濱松と奪り上田の城を奪く其故は天正十年甲別若柳
子軍の敗北条氏直 大御君に和を請ふべく甲信西國

八全く。大御君領納ありて上野の國ハ一圓に氏直を
と願す。此の旨に約決。大御君を乞と許し給ふ乞に依
て氏直を取らぬの信別佐久郡とゆく。大御君に款
然ふ処に真田安房守昌幸上野の國沼田と領して
今に至る。氏直小乞と不渡依て氏直使として
大御君に言て云く上野の國一圓に氏直を乞と願す。此
の旨先年の約違て真田昌幸沼田に在り乞と返す
渡らぬ。此の中と許是に依て。大御君昌幸に所
使を賜り速に沼田と避けて氏直に乞と渡す。此の旨
然命也。此の昌幸を乞と恨て。台命に依る。款吉

に志と通りて。大御君と款乞に依て兵を發して
昌幸を攻撃し給ふ。

国八月十日

二日 御味方の軍將真田安房守昌幸、折尾の上田
の城を圍て攻撃。兵を乞と拒りて争ひの兵乞と侮
進て二丸に攻入る。城將真田父子士卒を指揮し圍と
發て一同に切らぬ。此の軍將碎易して進海を昌
幸謀る。斯人として招集集る。紙旗と指して火火炮
と發し。城迫る。此の谷に伏せ置く。此伏兵急に起て
圍と發し。火炮と發して。城の懸る。其意山夜に響て



夥しく同工寄平の兵奮然騷て狼狽次城兵其利亦
棄して急に戦ふの間寄平の兵悉く敗亡次大久保忠
世園部甚盛平岩親吉等返り合て相戦り本多主
水正尾崎大清門依兄弟殿して退く昌幸勝に棄
て頻りに追ひ撃つの間尾崎兄弟臨留り奮戦して
鳥居元忠^{退て}高城を降して暫く款と相交へんと欲す
と云ふ款戸倉の城を兵を命じて元忠を降し
を降す元忠軍危急なりと云ふ小貝孫七郎大款と
暫く交て苦戦して遂に元忠其間に元忠退死去ら
るる保元也軍と返して戦ひて款して敗軍の士と集

ら云々味方の兵三百余人戦死後兵敗北して安に
追つ如と大久保平介忠孝馳来て忠せり旗を加煩川
の邊に集る時黒糸の旗と着けり詔騎進三来
て忠孝と挑戦し忠孝元と突死戦次敗死して忠せり
旗が加煩川の邊に建る如くして松平七郎右衛門尉三
善一市本下集^集人心を固く藏松平孫四郎と孫小八
市十郎久助没藤惣平氣多甚六市江坂茂助等
喜三市等馳集て其兵百餘騎に存し忠せりと卒
て地利を降した昌幸の率降右又款の多降降と
列と戦と挑して亂れ吞し其間僅に七八回戦る如し

昌幸り軍七日置五た清門厨味方の津と驅破く通り
去りて欲と上河内善言命槍とみく鞍の前輪と突と
えし去り日置り肌膚疵つく才かくして眠取もとえぬ昌幸
か頼門と前と當て暫く津と張ふととえし去り昌幸の軍傍
利と去りの田進して戦ふ次之に依り昌幸兵と収て
城より引合ふ今日の軍に寄るの軍傍酒井兵九言
独首級と得く我切あし

三日 寄るの軍傍九子の城より兵と奪りて飯盛川
と涉り八重兵と津と真田之と圍く上田の城と守
軍と奪りて海野の町と守八重兵と經く平白塚と

軍と出次た久保忠世之と撃りて柴田七九命と取て
鳥居え忠平右親吉り津と軍使と馳て軍と催況と云
去之忠親吉故て進由と忠世勇と押しと八重兵と出
去り去後ハ款味方戦と止く互ハ城と守り津と整て
晝日と經か去るの軍傍物尺の書取定て文に之と
守りか

十四日 駿府の城経営に依り 大津君の 命と奉て
松平と頼助の兵と津府より至款

十九日 諏訪安藤と手頼忠真田と初め

廿日 岡部弥次郎長盛北日物見の書也真田父子

兵と争して九子表に出張し高子の陣を襲ひ初め
置部上長盛軍と争して奮戦し真田遂に利を失く
城中を退れ去る長盛城兵數十人を撃つる首級
と得る者長盛後士として其首を持し其満願寺に
献じし 大徳寺其誠切と感嘆し是長盛に御感
と賜教

今度於九子表に自身より陣働り感念作殊に
方家中に者も此致之申し是又神妙作則之虎
合儀有る感嘆し此迄神妙軍忠者之儀在
村と迄志す一節作之儀を

八月廿六日 九郎康

昌叔泣出高友

寄りの軍務真田昌幸と討陣す外事日々一進りとい
ふも其利が少く依り士卒皆風屈し疲弊す外あり
大徳寺の台徳は遠く是より依り大徳寺より南に清門厨
康高井伊方子代出政松平因房守康重上田の城と相圍
乃軍務等無く収る軍と返りしに此の旨勅命と奉り
康高直政康重も満願寺と争して上田の城より此より日余
真田と討陣し此方軍務戦利を失ふ先日之取
雪の城中の處と親し御誓ひ及び願す外の処も昌幸



兼之志と秀吉に通一援兵と請ふ是より依て上杉景勝
秀吉の旨と之と數百騎の軍勢と卒く近日上田の砦
に後援の由其國へあるの由康高と政康重等前
に陸城あり後より大敵あり退ひしに不如下湯之岳
に歸り去る昌幸と共と輝ひしに後より大敵世小
諸の城より留て是より守る信利の兵保科源房大軍知
久下条等各己り館に歸り昌幸と共と拒て城と兼

九月十六

十日 大將若三列田原に將へ給ふ

十月小

二日 大將若田原より後府より歸りし

七日 大將若の召に依て松平と助家忠濱松
に急候次

廿八日 家忠濱松の城より登る 大將若法將を所
前に召て 命がて曰京師より質と善し上せりと宣ふ
か久松や不意 群衆を同むる法大なる同く質と京
都より上せ置給給ふ(此事宣ふか久松の旨各異口同言
に言上次 大將若も兼く此御嘆慮するもの依て京
都より質と上せ給ふの儀と此より物なる北条氏より京
臣二十人各給後文と 大將若に献次是より依て



大將若臣未だい國衆に命じて武徳文と書し來
小宗方の臣等と賜ふ

十一月

十三日 石川伯督等數百妻子を携へ三列國嶺の城を
避て京師より出奔次 武心京師より上 宿より大玄の村松平
主殿助の忠より居嶽沼海より其告あり 沼海の城より置嶺
の城迄行程三里 忠
國より兵を率いて沼海の城を奪へ河馬を難く國
崎より馳着くしと云ふ今皇石川數心城を避く尾列の
退くの間家忠先の新庄七之助に搦め降と二列の諸士
末一騎も不來是より依て家忠從卒と配く國嶺の城に

警衛次

十四日 辰之刻酒井左衛門尉忠次其餘三列の諸將是
嶺の城より馳集ふ

石川數心兼く國嶺の城を避て退びて歎す一列の同松平
源次郎の臣松平五左衛門尉近江守の竊より家人長野又
左衛門尉を遣へ數心より同意たり其等と結んで近江
聽りて使書て來るは必汝を撃殺せし歎と數心
其形勢を察して再び使來る事あり其日數心遂
に國嶺の城を去るは是より依て近江 大將若臣の所懸心
ありし事と恐く此日近江守愛子新次郎一生に源次郎



う家臣二人と相割瀧松より赴り、先此事と奉細渡を
次新次帝一生の質として瀧松より留る其後 大將若
遂に一生と瀧松より奉大給より返り、先其時より命
有る曰今後逆心逆心敷くよ与せと忠義と守り
去年蟹江の城として軍切と敷次其忠切と美福
せしと新次帝一生に御服指と賜ふ
十五日 伯耆守敷心国崎の城と出奔するより依り
大將若瀧松の城と御進発有る吉田の城より善郷
此日 大將若御書と北条氏に賜ふ
以飛脚より奉二封を奉奉奉府に賜ふ

十三日 山田守尾崎の退教候信別、山崎の質
正多の上方中合子細存め此の病より終る事
有、道波の作、委を奉奉奉府より与合衆より
許す

十一月十日

小澤及

十六日 大將若国崎の城より海軍有り、二刻の流士群
番次崎より松平守、御助の忠と与る、命有り、曰今後
敷心不慮の国崎の城と出奔するもの如し、家忠、松速に
馳来り、城と逆、漸すりの奉、忠義と励、常より武備

急ううかの勢。事なきに卒に應次河の上也甚以
御感悦あり是武門の面目也一人寄表徳と別心
休賜と河瀨の城を歸す

十八日 大將若之助の法將を命じて園崎の城を
修補せしむ。免れぬは松平主殿助忠忠の監すべし
其事速に成る。大將若御使として平松合次帝
と忠忠に許し賜と速成の切作と慶し給ふ

廿一日 大將若主殿助忠忠に免れぬを命じて法將を園
崎の城よりつて表膳と賜ふ

此日大將若西尾の城を渡御あり

廿七日 大將若西尾の城を園崎の城に還御

十二月小

三日 信列の於て小笠原右近守貞慶三千余の衆を
率して保科陣に直り居城高遠の城を圍て攻撃
正直拒れぬ。大將若海敵と多く撃取貞慶敗て
軍を還る

十四日 大將若高遠の城を於て正直に執切と慶せ
河瀨休年河瀨物訖と正直に賜ふ

今度山崎の右近守貞慶を命じて表相働と命じ
遂に誠款進つ者數五を討捕之由酒井大將門尉

急ぐうふの勢。事なきに卒す。應次河の上也。甚以
御感悦あり。是武門の面目也。人皆羨徳と別心
休賜く。河瀨の城は帰す。

十八日 大將若之助の法将より命じて国務の城を
候補せし。其れは河入松平之助助忠忠の監す。其の如
其事速に成る。大將若御使として平松合次郎

とある

廿一日

法将の城

此日左

廿七日

三日信

卒す

軍と退す

十四日 大將若高遠の城を捨て正直を執切と應次河
河感快年。河内物記と正直に賜ふ

今度山崎より河内物記を企送念におも表相働く事
遂に我款進つ。若輩五之を討捕之。中酒井大將門尉

進く小夜の

丁余の巻と

法将と国

西征進出海を志す誠極骨を志す敵は仍刀
一徳を志す進之能は左衛門尉守中保之流之

十二月十四日 弘康

保新海白皮

北畠信雄の使者羽柴下總守徳雅土方勅書清厨雄之
来りて 大將書に言て云く信雄既子秀吉と文和
事成と秀吉と 大將書素より忠懐有り唯一時
事成と云く暫く中絶也 大將書河内路有り秀吉下
和融ありは秀吉の事にあつては信雄も又大悦なり
之れが旨而使言と事成と云く 大將書故て是と

河内路有り是に依りて兩使事成なり歸り上
此年春山藤七帝忠成 後陸奥守
ト号ス 大將書の釣糸と
奉りて 台座院殿の傳よりあり浅井半兵衛守鴨田權
左衛門尉滝六藏等も成し後より肩抱の助けあり

天正十四年 丙戌

正月小

一日 群臣演相之誠を参りて 大將書に賜りて宣て

賀賀

二日 夜少り演相に於て河内路有り詔士密賀賀

十三日 大辨若所書と武川の諸士に賜ふ

今度諸人之事申渡せし事と名有証之旨高下
以事親親禮度感之令て居宅感候様様志
抄之志申取義事入精意廻之旨大保七事抄
心持務水之令候様様事御事申渡之旨

二月十日 武川

武川之中

大保新十高申多平八高 大辨若の命と奉り書候

武川の諸士に送ふ

十九日 大辨若之別吉良に慕へ給ふ

廿一日 秀吉羽柴下總守務雅と使とて 大辨若の

河上宗と諸小務雅吉良の河原館に申す 大辨若

に謂く秀吉の使の意候と違次 大辨若余がて曰

我道何う治よむと秀吉の風よ歩申すや務雅

言やうとて言宿の退記又翌日河原館の御儀也

河原館の御儀也 大辨若務雅と怒り申すに申す

すや早帰治とて下總守言を申して河上宗に

勸め奉り申す云 大辨若敢て乞と許し給ふと

大下河原館申すに申す申すに似て我は沈く今も申

後此より申す申す申す申す復来り申す申す

無礼の言命せしは是より信て勝雅河返言と聞りも
後らよ帰りよふ勝雅其事かき出秀吉圖て是と怒
りし事と深く懼りしは太師の城を奪て詳よそを
秀吉敬て怒りしと 太師君の旨信り吾も重き深
く慮え 太師君の河入洛を拒しと留て勝雅と
宿所へ帰し其語河邊よおて秀吉言ふ勝雅と呼
信雄も又拒しと云ふ太師の城を奪て秀吉寝
少ふりし眼指系二紗紐の帯を提け一童燭と秉て
後ら信雄おひ勝雅に秀吉語て云く我を 太師君
上京慮かり二人圖て獲らる事あり秀吉の云く

吾妹と云く 太師君の姫と云く 秀吉の云く
心あは吾母太師の質とて瀆れよわくは
何う 太師君の疑敬して入治^{ウツ}カレる事ありし
や留て重て勝雅と使して瀆れよわくは勝雅大
坂と奪て先を先利吉田よわくは酒井太師門尉忠次
に奉書して此儀と譲り即忠次と相伴て瀆れよ
城を奪候し 太師君の湯をひく候し 太師君母
又奉り何う是よ違ひと怒りわくは使の
趣賀候也強く河野頼朝の旨と云ふ是は信て
太師君勝雅と云く後勝雅秀吉の旨と述 太師君



是に諾し其後雅信と京都より歸て秀吉より告る秀吉
又大子悦み

二月大

十四日 大神君の召に依て松平と御助の忠告濱松より
修次

十六日 大神君北条氏改り異心試給ふに相討り
御進發あり其日濱松より着河原忠忠澤田の陣に

三月大

十六日 大神君相討り濱松の城より還り入給ふ

四月小

十三日 大神君嫁娶の御使として本多平八郎忠勝と
して送る。是より大給ふ忠務今日濱松と發給

五月大

十四日 秀吉嫁儀と調へ其妹と濱松より送る不婢妾
後者凡百五十余人浅野彈正少弼長政信康と今日
濱松より大給ふ忠と神原小平左衛門政之宅に寄りて
其日より別濱松の城より大給ふ婚禮成る

十六日 大神君神原小平左衛門政之御使として京都
に赴く。是給ふ忠政上より先づ富田左近の宅に
居る。是名彼より事して懇情浅くして取らして忠政



城。登る。秀吉。是。取。享。次。

七月小

十七日 大將若真田表河進致して今日駿府の

着河

八月大

七日 大將若真田河進候の事。秀吉。只。氣。と。嘆。よ。依。く。遊。表。河。發。向。く。事。也。引。有。り。

九月小

十一日 大將若真田表河進候の城。子。後。府。の。城。も。移。り。給。ふ。法。士。群。衆。も。是。と。候。し。奉。る。か。相。平。主。殿。助。力。忠。志。を。力。一。腰。

并に樽肴と献次其煩儀畢て後若君於長 急。願。り。て

右刀と献と今日吉日杉原に依り假りに駿府の城。移り給ひく濱松を河あり

十四日 大將若真田河進候の城。海。河。あり。秀。吉。使

して 大將若の河入洛と頻りに請ふ 大將若秀吉

婚縁と結ひ給ふと云ふ未河懸心敬也と臣等も

又河入洛軍。か。う。り。の。旨。強。て。諫。奉。り。外。に。依。り。河

上。事。河。進。引。有。り。是。に。依。り。秀。吉。 大將若の質

秀康として容也。と。歎。す。外。は。漸。く。其。國。へ。出。季

大將若曰吾小秀康と云く質と次秀吉是と表して



子と須波も其義子と教へ彼より不義あり全是吾の
誤にあつとも是れ悔む何う吾上京せんや秀吉を以て
其儀に於ては吾母大政所と質して冬別園崎の遣へ
其心と安んず人の言と違次是に依り 大御君所入洛
方人の約と定めて給へ時よ長濃守秀長 秀吉の弟後
に大和太領
言下 秀吉と諫之云く聖善と云く質して 歌子送る
武將のたより取也秀吉の云く秀長の心隘しと謂て聽
秀吉信子依り井伊兵部少輔大政所多平、八重忠衛
柳徳小平太直政等親族各一人と質して二京郡の
赴りし状あり

十月大

四日 大御君權中納言に任へ給へ

十三日 大御君瀨松の御所首途洛よ赴り給へ多平

八重忠勝柳徳小平太直政酒井左衛門尉忠次阿部善右

衛門尉三橋 後伊時守 永井右衛門直徳島井辰右衛門尉

元忠西尾隠波守吉次牧野諸波守等供養あり

十四日 大御君吉田の城より着御

十五日 大御君園崎の城より洛御北城より洛御登りて京

都より大質大政所明十八日足利より下着あり依り松平

主殿御家忠候士と卒して池難野の驛より出迎ふ所あり



旨 大辨若の台余と奉て忠志園橋と蔽して池程
駈の驛に赴く

十八日 主殿助忠池程駈の驛に至る大政所の乗車
と程園一園橋の城より一頃大政所と見知る人
かき若く秀吉欺びと謀めと知ると法人是と程の
間 大辨若の御其弟妹と演本より一園橋の城に
召て大政所と對顔安字是より依る其程と敬と

七日 大辨若園橋の城を河を途落り赴る也館より
忠洲送りとして宇當の郷迄供奉次忠洲馬一疋
馬衣紅梅也と
色割り海也
大辨若に赴る暇と告て河津の城に

歸ふ 大辨若河津園の間ハ大政所を管する一園橋
の城に留置ふ井伊兵部少輔忠政守多作左衛門尉
重次是と程園橋薪味と其屋の傍に積む若く秀吉
京都に於て 大辨若に對して黒心あるは 大政所と
燒殺次一匹の爲也

十六日 大辨若大坂より若所先々美濃守り宅に渡御
あり即日秀吉被召よまあり 大辨若より謁見して河
とと親く族中の河難報と告ぐ秀長として喫食膳
と掌りて 大善と事と美と居て

十七日 大辨若大坂の城に渡御あり秀吉庭上に迎へ



奉家尾別乃内府信雄同く城を登心 大御者信雄
に禮方多く先返り行給りて信雄辨して歩海と秀吉
大御者の御子御執り信雄より先返り。 大御者と
清一奉家らりて 大御者の家臣亦秀吉の旨に
多く先返り内より今秀吉の臣に敵と今事と海と秀
吉 大御者共々天下を登り給り奇蹟難珍是也
妻積次利休より茶碗点りて喉を應早て後
大御者暇と告ぐ還りし時秀吉左刀并茶壺
白雲ト
口スと給く 大御者進路を教具に宅地と聚樂
乃城内に進る也 大御者の家臣等も各屋地と賜り

美濃守亦長秀吉の旨に清く 大御者の所館大政
一所并に門と造る藤堂與左衛門尉高虎 後出渡守又
和泉守ト改公
是と監次

十一月小

五日 大御者三二位に叙し給ふ

七日 讓位

九日 辨急小平左衛門後五位下に叙し或部左衛門に任

十一日 大御者御帰國より依り松平主殿助家忠大

高より迎へ奉る 大御者に賜り御帰國と唱へ奉り

國邊の城に供奉する若君濱松より國邊の城に渡御

大に美祿次
十二月大
四日 大津若濱松の城より海府の城に移り給ふ所
家人等月迫り給ふ所の家と海府に移次者少く大久保
忠隣等毛に後其の法士年と論く各移住と
此年内藤紀伊守信正と大巻頼とあり時よ信正十
九歳 内藤三左衛門
守信成カ嫡子
此年大津頼五郎左衛門尉康高り女と少く阿部善吉と
門尉信正 後に伊豫守と号す 次男左馬助忠吉に嫁次康高と信勝
連年交深の朋友也是に依り康高 大津若の余の

かへ 大津若乃還河と訪せ給ふ
十二日 大津若河帰國し給ふ依り大津河も又大坂小
堀りより河送りしして井伊直政と相別り給ふ日と歴て大
坂より少く時秀吉直政の城に招く饗宴應ずる川伯者
守忠正と少く相伴し給ふ直政教ふり不義と悪く一日
意の外に終り一言の通せ給ふ其後秀吉茶を直政に賜ひ
時よ亦直政と少く相伴し給ふ直政秀吉の品臣あり留て云く
人面獄心とは此教ふり事也普代り主と背て秀吉に
属次不義と云ひ怯弱と云ひ武士の相更ふ家者に非
次是河國之流人輩と笑ひ恥し決直政の豪風と

伺ひ請て増して横須賀に忠告を招く

天正十五年丁亥

正月小

一日 龍王後府の城を参りて 大津善子湯へ二日あり
願儀と献次

二日 初より大津後府の城を控へ河内幼方より龍王後府へ

七日 信州の真田好い小笠原等より吉子湯へ入る

上京するの儀あり 大津善子酒井左衛門尉忠次と出く

是に相副らる忠次真田小笠原と携へ後府へ出て活

に赴く

廿日 後府の城経営松平主殿助家忠是を監治へ此の

旨 大津善子の余と出く

廿六日 主殿助家忠召に依り後府より出く

二月大

五日 後府の城二曲輪経始力忠是を監治

十三日 二曲輪経営成ふ

三月大

十八日 酒井左衛門尉忠次大板より後府より歸ふ

四月小

十五日 後府乃市城の経営成ふ

此月 秀吉師と帥と豊前筑前の換岩石の城を改む

大津若本多豊後守廣友とて軍の雌雄と回つて

武人廣友能く敵と軍切なり秀吉是を廢して金潭

の眼指并に羊の皮の羽織と廣友を換く

五月大

廿三日 松平備後守法善卒次八十
三歳

七月小

十七日 大津若後府乃城御番達治よ敵を治ふ

十九日 大津若二別園橋の城よ若御主敏助力忠園橋に

を復し城よ登る

廿九日 大津若若別田忠に将了給ふ今日小松系に

着御

十月小

七日 大津若乃命と奉る後府乃城駒の段に石と墨

と敏助力忠是が築く

十一月大

三日 駒の段の石垣成ふ

四日 敏助力忠今日も後府乃城二乃由治の石

垣を築く

十五日 大神君酒井左衛門尉忠次、宅に渡御あり
饗應表と魚次日終、棧柴所見物あり、夜も大戌之刻、
ありて所

十二月小

十八日 大神君兼た近侍の大將、同日右馬寮之河邊
北平松平源次郎行時十
二歳 大神君の御前より於て之暇
所濟の字、賜く家業と号次

北平青山藤七郎忠成、與力の士と附、其後二十
五人 是と久能
衆ト云ふ

天正十六年戊子

正月大

一日 群臣後府の城を登り、大神君に謁し、正旦と祝
く奉る

二日 夜に入例の如く、河邊御あり

三日 奉る十五日、後府の城を經營あり、主殿助忠
是御渡す人の旨、台余方、外の中流井忠次、家方、昔

十八日 忠次後府より冬候次

十九日 大神君中泉に將、給ふ

二月小

四日 駿府の城徑始

五日 大神若中泉より後府の城より河

七日 大神若河上京より今日後府河首途より

の首より相催り処に甚雨に依り河廻りあり

三月大

一日 大神若後府と河首途より赴り北日中泉に

着河より

十四日 大神若今日園橋の城出河先日より置橋の城に

河首より

十八日 大神若河入落^治

四月小

三日 博多臺芋頭の水指小壺小鳥の天自羽節の茶

扱ぬい粟二千俵と秀吉より大神若に進せり

十四日 関白豊臣秀吉取長樂の家より河首より是に

依り今度 大神若河上京より此時 大神若の臣

井伊兵部少輔直政後五位下に叙し侍従に任次大澤

兵部右輔基宿後五位下に叙し侍従に任次本多中

務左輔忠勝酒井兵部右輔忠世大久保治部左輔忠

隣平岩主計頭親吉本多豊後守廣孝園部内膳

正長盛管沼大膳左衛門牧野右馬允康成等各後五位下

に叙次

廿七日 大將若京都より後府に還河

五月大

六日 北条氏政と秀吉和睦成る

十二日 後府之城大守の経営力忠是を懐次其事迹

成る 大將若是に懐せしれ忠是の所使と賜る

閏五月大

十日 大將若河邊に依り北条氏政と秀吉和睦成る

六月小

十三日 大政所秀吉の母堂疾病の告かりに依り 大將若

洛に赴りしに催し給ふ 大將若の河邊秀吉の妹に

入後府と出て洛に赴り給ふ

八月小

七日 北条氏政和儀成るに依り使と秀吉遣次其使

者北条義濃守先づ後府に河邊秀吉の妹式部左補

康政成瀬孫八郎兩軍京都の案内者として義濃守

に伴ふ今日冬河邊秀吉の妹に

十五日 榊原康政成瀬孫八郎北条義濃守と携り

大坂の城に登る秀吉出て義濃守に見せしめし義濃

守謂く云く氏直未年上洛せん欲と先年

大禱君と諾す所の上野國沼田弥氏直是と領す人
此中と請ふ秀吉の云く 大禱君ト氏直國境の約
吾心是と委く知りと重て氏直の臣と指し上も猶其
子細と遠す人々長濃守暇賜く大板と奉次西の
長濃守小田原より帰り此旨氏直に告る是に
依て氏直其後亦板部國江雪舟と使して大板に赴
りて沼田領内の事子細と述く是と請ひ来り天
正十七年臘月の初旬氏直必次上京して秀吉に
相見せしむ相催の中長達に秀吉沼田と氏直によへ
しく諾して来り必次氏直上京す之記の旨と望く

江雪舟に約次江雪舟悦く小田原に帰る

九月大

四日 秀吉の母堂病愈是に依て 大禱君京都
河内國今日冬別大禱君の者所之助忠忠大禱君
冬之候して 大禱君に湯次

十日 大禱君後府の城に還河

十一月大

十二日 大禱君國崎の城に渡河有り冬別之法士國崎の
城に登りて 大禱君に湯次

十二月小

廿一日 大御君名刻吉良に將し給ふ

廿二日 秀吉之使者吉良の御籠館に來る秀吉鷹と

大御君に進せしむ

廿四日 大御君園崎より還り来

此年奥平信昌次男千時駿府の城主登り始て 大御君

に謁次千時松平の姓に御禱の字と賜り從五位下に叙し

右京大夫に任し家治卜号次上列長根に於て采地と賜

是 大御君の外孫松平の依て也此時目く信昌、四男

千時六歳後下 御守卜号と 山内院殿の御前より召く松平の姓と

并文し御禱の字と賜之忠明卜号次

此年土屋惣藏忠直後に民部卿始て 大御君に謁次

台余に依て茲後少將忠輝後越後守慈母長覺養て子

之次父乃惣藏昌恒生客の後甲列し御後府に來て親居

此年 大御君の御余に依て酒井左衛門尉忠次り三男

小平次後には左衛門尉掃部助信願養て

子とて其の督と継しむ

天正十七年己丑

正月大

一日 後府の城の旦の榎儀例の如く法士城より登りて

大神君に湯江

二日 夜に駿府の城に於て河津御方より松平主殿の家忠
城に登り着る

廿八日 海府の城経始

廿九日 大神君中泉に侍りし事

二月小

四日 大神君中泉より駿府より登御

五日 大地震駿遠兩國の民多ク破れ倒る

十二日 大神君今日二日曾河上洛方宛の旨法士に簡し催
す

十三日 信州真田より後府より来り城に登り 大神君に

湯江

十四日 大神君今日之河上洛暴雨に依り河津御方より明

後十六日河津御方より此の由に定りし

十六日 大神君より母公河津御方に依り河上京今日も又

河津御方より

十八日 河津御方河津御方に依り河津御方に依り 大神君今日

後府之城河津御方より赴りし事此日田中に着御

三月大

七日 大神君河上洛

十五日内藤政長後五位下に叙く左馬助に任次是日里
十四年秀吉豊臣氏
と政長に授かる

四月小

十日駿府之城経営成る

五月大

十九日若君台連院殿之河母堂西卿之局後府に於て逝去

廿二日西卿之局逝去に依りて多岐助忠駿府に赴り

廿四日西卿局葬禮之事龍泉寺後宝臺院に於て執

行也

廿七日秀吉之妾法井備前守長政カ女男子誕生次其女と露野臣

名譽記

六月小

四日左将若秀吉之男誕生と増し給ひて為り治之出

て大坂に赴り給ふ

五日秀吉黄金二百枚白銀二千枚と給ふ左将若

に進也

六日大將若大坂に出給ひて河内國に赴り給ふ

十日大將若後府に還り入給ふ

廿三日大須賀五郎左衛門尉康高卒去次六十
二歳

七月大

九日 大神若来月十六日、少子富士山の材木引き下す、
昔より敏明家忠及能將の融し催し喜故、天正十四年、少重
秀吉洛の東に大神殿と建立、沢佛像漸く成り然れども
御殿の棟木あり、是に依り四圍九列波垣山飛彈山に
求海と云物をも是あり、工人と富士山に登り是を見せ
しむるも棟木成りし、木あり工人京都に歸り秀
吉に造り是に依り秀吉使として、大神若に此木と
請ふ、大神若是と諾し給ひ能將を召て人夫と集
し、此木と富士山より引き下す、この上り也
十七日 富士山材木之事に依り家忠人夫と率として駿府

に赴く、
十九日 家忠及び能將各駿府より着り、旅服と更して
城に登り、大神若に謁見時、余あり曰、人夫等八、明七
日大宮迄差遣り、家忠は暫く駿府に留り、明後亦
一日井伊直政の宅に渡御あり、榎柴、台賢あり、供
奉之、是と見物致次へ此の旨、釣余と云、是れ
退出次
二十日 大神若井伊直政の宅に渡御あり、榎柴
柴御見物あり、此の旨兼て相催御、云、去今晚より
甚雨に依り、御見物あり



北日秀吉富田平左衛門尉 後に右近将 津田四郎右衛門尉

後に隼人 正下号スと西人使として東國より赴くむ其故は去年秀

吉氏直下約す此処の上野の國沼田の城を以て真田昌

幸是と以直又避渡す今この旨也西人先づ駿府に至りて

大神君の賢慮を伺ふ大神君柳屋式部左衛門康政と

して西使に副らし真田の館に赴く欠給ふ三使真田

館に至る 鈎余と述ふ真田 余に從て沼田の城を北

条に避け渡次

廿六日 大神君井伊直政の宛に渡河ありて棧柴御見

物あり松平主殿助家忠及び龍將と彼の館に召次各

急候し余に依り是と見物次棧柴十番畢て夜に

入還御

八月大

二日 富士山乃枝木引き出次女依て主殿助家忠及び遠

参之兩國の諸將各奥津に至る

廿七日 大神君富士山より引き出次枝木御覽乃為メ

今日大宮に着御家忠大宮に迎へ奉て 大神君に

謁次是少里 大神君甲列女赴せ給ふ

九月小

十八日 大神君甲信兩國の人吏を以て甲列東郡の城ヲ

築く免給ふ是に依て富士山に在て公役と勤る甲信乃
人吏等甲列東郡に帰リ集て城を築く駿遠参の人
吏等ハ富士山に留居て十月に至る遂に彼木と山とを
引出次

廿六日 大將若甲列郡留郡中窪根津寺の所を御
巡見時に鳥居長右衛門尉元忠白銀十枚綿百把漆百
桶と献次

十一月大

三日 北条氏直沼田之城を請取同姓安房守氏邦とて
沼田乃城を居りしむ

爰に沼田之邊を郡久留養之城ハ真田昌幸是と領次安
房守氏邦ハ家ノ楮股能登守ト云者有る楮股小
平六範細カ後行て鉅慮至愚方ハ血氣の勇者也
沼田の邊城ヲ郡久留養一城を領て氏邦邦是と領せし
事と悔て楮股卒爾に兵を棄てて郡久留養之城を
攻撃す城を守る処の善兵徴湯杉多に依て即時城
を隔る遂に郡久留養之城を揮領次北事京都に對
して逆意相違其上氏直沼田と請之領す多に於てハ
必次上京す人此の肯堅く是と約す多の所其約ハ
爰に高の中京都に聞て秀吉大に怒て軍と東國に發

して北条父子と退治せしむ催次北条是と圖て石巻左
馬助として京都に在りし頃陳謝して云く今度邦久留
養之誠と改め奉り全く小室父子カ下知にあつと外様之
家人等不案内にして其子細と知り次攻て北城と得し
事卒忽之至り其悼り多きの上と述ふかゝる事世
秀吉憤之故て許たス使之る巻左馬允と橋おして
相別に帰サズ

七日 富士山之枝木引き下次の人吏等駿府より帰し

十四日 秀吉書と改め北条父子に與ふ

一北条黨頃年茂如朝廷而不上洛在關東任已意

甚狼藉故去年欲誅討之而駿河大納言以其婚
姻故屢有所請是以示條款則彼既謝之而其族
羨濃守未執謁畢

一先手駿河大納言所被定之條款與羨濃守言奉
裏相違今吾見羨濃守聞國境等事論須正經界
彼使叔部岡江雪上京乃尋問之則大納言與北条國
境之約如何哉甲斐信濃諸城者大納言以戰功可
被取之上野國者北条可領之所告定如此大納言既
取甲信而上野沼田者北条刀弱不能取之而言大納
言違約寄事干左右未及上京何哉今可授沼田



△是ヨリ文字書誤テ高シ

於北条雖然真田所素知之上野國中三分二附於沼田須
與北条三分一者須附真田其中所有之城郭者真田
可守之而彼三分二之替地自大納言可授真田如此相定
北条上京半取其書札而後可遣使節投沼田江雪聞
其上旨而歸

一 今年十二月上旬氏政須来執謁既捧一翰依是吾遣
津田四郎右衛門尉富田平右衛門尉附與沼田於彼
一 彼取沼田之後吾想如一翰之約彼當以京不然彼攻
取真田領内之那久留養城彼表裏背約吾何見彼
使者乎

一 我自弱昇在信長之幕下馳驅山野枕干戈攻城野戰
夙夜不怠竭忠勵切中身受主恩以顯其名奉命征
伐西國之間明知日向守光秀叛乱弑信長吾聞此事急
決西國之雌雄以得利運不日歸洛早誅光秀仰報君
恩其後柴田修理亮勝家欲覆國家吾亦已誅之其
餘叛者伐之降者近之諸方皆無不屬吾麾下者亦
未嘗有一言之然故天命乎吾既舉龍登鷹揚之譽
焉鹽梅則嗣之人萬機委我一官總已獨氏直其天
庖理奸媮不庭何不罰之乎普天率土遺物之輩不
可不速誅之来歲吾操節旄而進發當劓氏直首



廿九日 大將若駿廣之河首途洛之越紀給之此日田中
に著卿同日小笠原楳津守安元始之若新九郎卒去次
此月酒井小五郎家次後五位下に叙し宮内右輔に任次

十二月大

一日 大將若濱松に著卿

二日 大將若冬列士田に著卿之敏助忠誠を譽て
大將若に謁次

三日 大將若園崎に著卿

五日 大將若園崎の城を出給て京都に赴るに給之

九日 大將若河入洛

十日 大將若秀吉に河野對顔北条退治之功を相報給之

十二日 大將若洛に出給て河野國に赴給給之

十三日 末歳相列河進登之事必定せり龍將兼て軍

用を調へしむるの旨 大將若酒井宮内右輔家次に

命して冬列之龍將を是と頼まし給ふ家次り使

今日京都より冬列に著卿

秀吉末春末迄之軍役と定て洛國に廻文次

一 大將内々可為中役事

一 中國并河内々可為中役事

一 長坂小尾筋々可為中役事

一 小國より上の人出役事

一 遠冬後甲信此より國より上の人出役事

右軍後通國の事と沖野まふ表の月朔日秀吉

と少陣と也仍也件

五月十七日
十一日

長束左藏左補正家よりして糧米之事掌トらるる

十六日 大神若京都より河内國此日冬列西尾之城

着河

此冬 台漚院殿千時十 秀吉河内對顔之為河上京より人取の

昔也秀吉圖て知雅の若君陸東之河内難難と常て書

台漚院殿之家臣等に遣して河上京を止らる是に依て

台漚院殿河上京を河内引取り千時 大神若河内在京

方り 台漚院殿之臣酒井兵衛初文忠世後三雅繁 内藤弥三

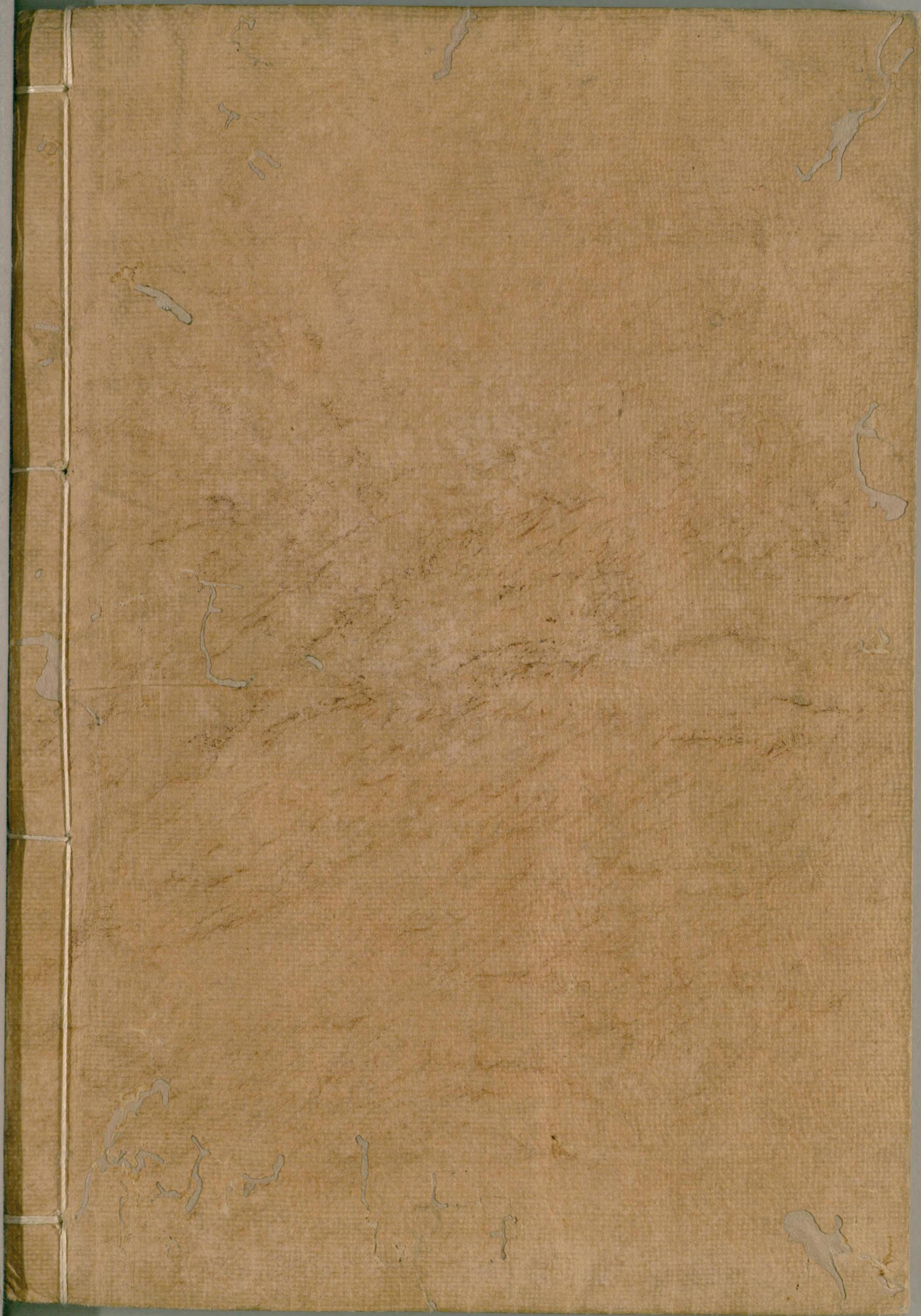
之師三氏 後三修理 青山藤七三師忠成 等後三常陸介又 等に 大神若

御書と賜て頻りに 台漚院殿の御入洛と催す

838
12
87

三十四枚
[Faint handwritten text in Japanese]





国立国会図書館 タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用